

俳句自由律

無人の家

松本西夏

無人の家雑草に埋れ 玄関戸蔓葛巻く
勢い伸ぶ蔓葛 足元探り庭に踏み入る
無人の家は無人のままに 訪うてなお
脳天に火花散る 頭上注意と閃きし時
帽子脱げば血染めの髪 束となり落つ
隘路に入り 蔓草の根抜きし反動なり
脳天縮む 出窓の角に打ちつけしより
雑草魂 コンクリートの罅^{ひび}穿^{うが}ち出ずる

蜜柑金柑古枝に残りて 新芽出でをり
花愛でる間なしに 春嵐今日も来るか
爆弾低気圧とう 硝子窓に雷光飛沫く
花冷えに病める 入院点滴止む間なし
葉桜となりぬ 見舞い人坂上り行く道
母病み寢^ねれ眠る 一人暮らしに拘りて
兄弟の争い激し 母病み寢^ねれいる間も
骨肉の争いとなる 何故ぞと胸に聞く
美しい夢あり 海原に虹の国出でたる
笑い興じて目覚む 苦い涙溢るは何ぞ
遙かの的^ま目指し走るべし 今更なれど